

# 話し言葉における助詞の現れ

山田 剛一 中川 裕志

横浜国立大学 工学部

{aron,nakagawa}@naklab.dnj.ynu.ac.jp

## 1 はじめに

世の中では、マルチメディアでもインタラクティブなものもはやされている。ここで音声言語の意味理解が実現したとすれば、それを核とした次世代システムへの道が開けるのかもしれない。ついに自然言語処理でも就職できる時代がくるのだろうか。

しかし現状に目を向けてみると、話し言葉におけるさまざまな現象は、まだまだ解明されたいえない状況にある。音声言語としての側面からは分析が進んでいるのかもしれないが、話し言葉特有の表現とその意味を、自然言語処理に適用できるような形で分析した研究は少ない。話し言葉と書き言葉の言語としての性質の違いに、もう少し注意を払う必要があるのではないだろうか。

本発表のテーマは「話し言葉における助詞<sup>1</sup>の現れ」である。次の例を見てほしい。

(1) 今年も会場東工大なんだね。

この例では「会場」の後に助詞がない。このように文字にしてしまうと漢字が続いて読みづらいが、話したり聞いたりする分にはきわめて自然である。話し言葉においては、名詞句は助詞を伴って現れるとは限らないのである。このことは、書き言葉とは助詞の用いられかたが違うということを意味している。ここでは、無助詞を含めた助詞の使われかたとその意味を分析し、話し言葉の意味解析への一歩としたい。

<sup>1</sup>格助詞と、格を代行する取り立て助詞を対象とする。なお、助詞を伴わない名詞句は並列構造においても存在するが、それは書き言葉においても適格であるのでここでは扱わない。

## 2 無助詞が現れる「話し言葉」とは

ここで現象を分析する前に、無助詞が現れる「話し言葉」とは何であるか、簡単に見ておこう。

無助詞の問題を考えると、物理的な形態、すなわち音声言語であるか否かで議論するのは好ましくない。なぜなら、他の多くの音声言語特有の現象とは違い、無助詞が存在するかどうかは言語の性質によるからである。ここでは、対話や独り言で用いられる言語を話し言葉と呼ぶことにする。つまり、音声であっても、新聞を読み上げたものは書き言葉であり、書かれたものであっても、それがセリフであれば話し言葉とするのである。そのような話し言葉においてのみ、無助詞は存在する。

では日常会話などでは常に現れるものなのかというと、そうとはいえない。このことについては、意味を分析してから再度考えることにする。

なお、話し言葉に固有の現象と捉えられているものはさまざま、実際、物理的に音声として発せられることにより引き起こされるものもある。たとえば、言い淀み、言い間違いなどの現象がそれに相当する。これらが文字になっているのは、いわゆる書き起こしぐらいしか存在しないだろう<sup>2</sup>。これらは、話し手が、限られた時間内で発話することを要求され、不完全な処理のまま発話してしまったことに依存した現象であり、いわば話し手のミスである。ミスをしたこと自体の意味を解析する必要はないため、ミスの構造が捉えら

<sup>2</sup>意図的に間違えてみせるような例はもちろんある。その場合には全く異なる意味解析が必要だろう(解析が必要なら)。

れさえすれば、意味解析上の問題は残らない。

一方、助詞を伴わない名詞句の存在は、話し手のミスによるものではない。話し手が、助詞を用いようとしなかった結果なのである。では、なぜ助詞は用いられなかったのか。くわしくは次節で検討するが、単に助詞が不要であった場合と、助詞を用いると別の意味になってしまうためあえて用いなかった場合とがある。

### 3 話し言葉における助詞の現れ

さて、本題の助詞の現れについて分析をすすめていくことにしよう。第1節で述べたように、話し言葉では名詞句が助詞を伴って現れるとは限らない。しかし、人間は助詞の有無に関わらず、発話を理解することができる。助詞がない場合というのは、助詞が不要な場合なのである。

ここで言語の手段としての側面を考えると、簡潔な表現が可能であれば、その表現を選択することが効率的である。このことから、話し言葉における助詞は、必要がなければ基本的に用いられないものであると考えられる。

なお助詞が必要な場合には、発話が解釈できなくなる、あるいは解釈しづらくなるのを防ぐために用いる消極的使用<sup>3</sup>の場合と、助詞固有の取り立て的な意味を表現するために用いる積極的使用の場合がある [10]。

#### 3.1 用法の一つとしての無助詞

名詞句は文頭に近い位置にあるとき、主題性を持つことができる。助詞のない名詞句が主題性を帯びているとき、助詞がある場合とは違った独特の意味あいを表現していることがある。助詞がないことにより主題性の解釈が限定されず、状況に応じてさまざまな解釈がなされるのである。まず、次の例を見てみよう。

<sup>3</sup>名詞句の意味素性と述語の意味役割の要求する意味素性からは、その対応関係が定まらないような意味的な場合と、助詞がないと統語的な曖昧性が生じてしまうような場合などがある。

(2) a. 先生きた?

b. 先生はきた?

c. 先生がきた?

この場合、aでは純粹に先生がきたのかをたずねている感じである。助詞がないので特別な意味あいは表現されておらず、言語表現からは、「先生」と「きた」の間には対応関係があるということしか得られない。

bでは、対比の解釈が自然である。ここで考えている場面では、主題性だけならaで表現することができるので、あえてbを発話するということは対比を表現したいからなのだ、という判断はたらくものと考えられる。ただし、どの程度対比と感じられるかは、状況と述部の意味に依存している。この例で用いられている「くる」という述語は対象が色々と考えられるような場面が一般的なので、一文で見ても対比の解釈が自然に生じてくる。一方、例えば「先生は原稿書いてた?」という場合、他に原稿を書くような人が思い当たらないような場面では対比となりにくい。ただ、いわゆる対比でない場合でも、bでは無助詞のaとは違って主題性の解釈に制限があるぶん、提題の性質に差があるように感じられる。

cはかなり特殊で、「他の誰かじゃなくて、先生がきたわけ?」というような、総記の解釈が成り立つような場面ではしか使われない<sup>4</sup>。

次に、もっと変わった例を挙げよう。

(4) 私脱いでもすごいんです。

この場合、話し手は「私」が「実は脱いでもすごい」という、聞き手にとって未知であると思われる事実を伝達しようとしている感じが強い。

<sup>4</sup>「きた」だけに強勢がある場合、「先生はくるはずじゃないのにきたわけ?」というような解釈になる。この2つの解釈は、意味的には

(3) a. 「先生がきた」だって?

b. 先生が「きた」だって?

の2つに対応していると考えられる。

ここでもし「私は」や「私が」と言うと、「私」が取り立てられて助詞固有の意味、対比や総記のほうが表に出てきてしまう。なお前述の意味は「私って」の場合に近いが、この場合、それは無助詞の名詞句と文の述部との対応関係から解釈された結果であって、「って」が省略されたのではないと考える。

### 3.2 助詞の現れと意味

さて、無助詞も含めた助詞の使われかた全体を見てみると、それは無助詞のない書き言葉とは異なった様相を呈している。書き言葉では助詞や別の表現で記述される意味が、無助詞で表現されるからである。

助詞には複数の用法を持つものがあるのだが、単純な関係は助詞がなくても表現することができるので、そのような助詞の使い方は無助詞に吸収される傾向がある。ここでは、格助詞の「が」と取り立て助詞の「は」について、無助詞との関係を考えてみる。なお、結果として助詞の有無で意味の違いが表現できるようになるので、そのこと自体も話し言葉の効率性に貢献していることになる。

「が」

格助詞「が」の用法には、中立叙述と総記がある。単にガ格であるという中立叙述は無助詞でも表現できるため、話し言葉で用いられる格助詞「が」は、取り立て性のある総記の用法が多いと考えられる。

「は」

取り立て助詞「は」には、提題と対比(対照)の用法がある。これは本来は厳密に分けられるものではないのだが、単なる主題性は無助詞で表現することができるため、話し言葉では、「は」は対比の意味で使用されることが多いと考えられる。

### コーパスでの確認

以上の仮説を検証するため、書き言葉と話し言葉のそれぞれのコーパスで、助詞の用法を分析した。無助詞が現れないものとして、日本経済新聞の記事本文(約1日分、1,567文)、無助詞が用いられるものとして、とあるサークルの飲み会での会話(書き起こし、およそ1,980文)を用いた。分析の対象は、格助詞「が」と取り立て助詞「は」(名詞句を取り立てている場合)である。

結果をそれぞれ表にして示すと以下のようになる。

表 1: 格助詞「が」の用法

	中立叙述	総記
自由会話	35%	55%
新聞記事	97%	3%

新聞記事では単にガ格を表すために使用される割合が圧倒的に高いが、自由会話では逆に、助詞固有である総記の意味を表現するために使用されることが多い。

表 2: 取り立て助詞「は」の用法

	提題	対比	判断不能
自由会話	14%	62%	24%
新聞記事	55%	34%	1%

「は」の用法が2つのうちのどちらであるかは、コーパスからは判断がつかない例も多かった。これは、話し言葉の状況依存性によるものである。よって解釈には幅があるものの、書き言葉と話し言葉では明らかに傾向が違い、話し言葉では主に対比を表現するために使用されていることが示されたといえる。

## 4 無助詞の性質と「場」との関係

第3節で述べたように、助詞が用いられない場合は大きく2つに分けられる。

- 助詞で格関係を表す必要がなかった場合
- 助詞を用いるのとは違う主題性を表現したかった場合

このことを踏まえた上で、無助詞が現れる話し言葉についてさらに考えてみる。

単に格助詞が不要である場合に、格助詞を用いるとどうなるであろうか。言語表現が書き言葉の文法に沿った形となることで、話し手が改まらなくてはならないような場面でも使えるような言葉になる。つまり、フォーマルな場においては、不要であっても義務的に助詞が用いられるのである。

では、主題性の表現の一つとしての無助詞はどうだろうか。この場合、明確な場の制限は存在せず、かなりフォーマルな場面でも現れる。

#### (5) ご注文、お決まりでしょうか?

この類の主題性の表現は、機能として認められているのである。なお、書き言葉ではこのような無助詞も存在しない<sup>5</sup>が、それは、このような提示のしかたは対話上の機能としてのみ存在するものであるからだと考えられる。

## 5 おわりに

話し言葉における助詞の現れと意味との関係について分析した。話し言葉の意味解析を正しく行うためには、書き言葉を解析するシステムとは別の助詞の意味モデルを使う必要がある。また、統語論だけを頼りにしたシステムでは無助詞の解析には無理があると考えられるので、それとは異なるアプローチが必要となるだろう。

謝辞 本研究では「日本経済新聞 CD-ROM 版 (94 年版)」を使用した。研究目的での使用を許諾して下さった日経総合販売 (株)、その実現に努力された奈良

<sup>5</sup>文語では「彼きたる」のように無助詞が普通であるが、これは別の現象である。また、いわゆる見出しでは例外的に無助詞が存在する。

#### (6) 年次大会開催される

先端科学技術大学院大学の松本裕治先生、および各種検索ツールを作成し公開して下さった方々に感謝いたします。

## 参考文献

- [1] 金水敏. 語りのハに関する覚書. 益岡隆志, 野田尚史, 沼田善子 (編), 主題と取り立て, pp. 71-80. くろしお出版, 1995.
- [2] 田窪行則. 名詞句のモダリティ. 仁田義雄, 益岡隆志 (編), 日本語のモダリティ, pp. 211-233. くろしお出版, Aug 1989.
- [3] 中野幹生, 島津明, 小暮潔. 対話文の文法構築に向けた分析. 自然言語処理研究会報告 95-NL-107-5, 情報処理学会, May 1995.
- [4] 丹羽哲也. 無助詞格の機能 — 主題と格と語順 —. 国語国文, Vol. 58, No. 10, pp. 38-57, 1989.
- [5] 長谷川ユリ. 話しことばにおける「無助詞」の機能. 日本語教育, 80 号, pp. 158-168, July 1993.
- [6] 藤原雅憲. 助詞省略の語用論的分析. 田島, 丹羽 (編), 日本語論究 3—現代日本語の研究—, 研究叢書 122, pp. 129-148. 和泉書院, 大阪, Oct 1992.
- [7] 丸山直子. 助詞の脱落現象. 月刊「言語」, Vol. 25, No. 1, pp. 74-80, Jan 1996.
- [8] 丸山直子, 橋本三奈子, 桑畑和佳子. 対話文における、いわゆる「助詞の脱落」について. 音声・言語・概念の統合処理による対話の理解と生成に関する研究 研究成果報告書 第 2 年次, 文部省 重点領域研究, March 1995.
- [9] 丸山直子. 話しことばの諸相. 音声対話理解シンポジウム予稿集, 平成 7 年度公開シンポジウム, 音声・言語・概念の統合処理による対話の理解と生成に関する研究 文部省重点領域研究, Nov 1995.
- [10] 山田剛一, 中川裕志. 助詞・ゼロ助詞・無助詞. 電子情報通信学会技術研究報告 NLC95-63, 言語理解とコミュニケーション研究会, 電子情報通信学会, Dec 1995.
- [11] 山田剛一, 中川裕志. 助詞・無助詞の意味と役割. 第 52 回 (平成 8 年前期) 全国大会 講演論文集, 第 3 巻. 情報処理学会, March 1996.
- [12] 中川裕志. 話し言葉の特徴と解析. シンポジウム 3: 音声によるマンマシンインターフェース 第 52 回 (平成 8 年前期) 全国大会. 情報処理学会, March 1996.